



国際文化研究科副研究科長 劉庭秀教授

国際文化研究科は、設立当時から国際文化をキーワードに、人文・社会科学、地域研究をはじめ、学際研究、文理融合の研究を進めて参りました。私は、2000年度に、国際文化研究科において文理融合の研究・教育を担当する教員として着任してから、24年間、本研究科で研究教育を行って参りました。正直、着任当時は、文理融合の研究をどのように進めていけば良いか戸惑っておりました。しかし、多様な分野の教員、院生達の研究内容に触れながら、そのヒントを見つけ出してきた気がします。

ところで、基本的に、国際文化研究科は文系部局であり、豊富な研究費があるわけでもないので、外部資金を獲得しなければ、海外のフィールドワークの実施や実験装置の購入も容易ではありませんでした。しかし、逆にそれが、積極的に外部資金を獲得し、産学連携を推進する原動力になったかも知れません。

国内外における様々な社会、経済、環境課題を解決するために、行政や企業の多様なニーズを吸い上げて、自治体や民間企業との共同研究を行って来た結果、分野横断的な研究、産学官連携、国際共同研究のあり方、つまり国際文化研究科だからこそできる、文理融合の研究・教育成果を見出すことができた気がします。

この数年間、国際文化研究科には様々な変化がありました。言語総合科学とグローバルガバナンスと持続可能な開発プログラムが作られ、英語で学べる環境が整われました。そして、MS&AD インシュアランスグループのご支援によって毎年寄付講義を開講しております。また、来年4月から日本システムケア株式会社と一緒に文系初の共創研究所を設立することが決まり、多様な研究テーマを探索し、部局横断型の共同研究プロジェクトを立ち上げていきます。

一方、国際卓越研究大学に相応しい、研究力を向上させるためには、伝統的な学問領域と分野横断的な研究分野のバランスを考慮し、多様な学問分野との連携を図りつつ、次の30年に向けて国際文化研究・教育の新しいビジョンを作っていく必要があります。

人に例えれば、国際文化研究科は31歳の壮年です。私が国際文化研究科に赴任したとき、丁度32歳でした。当時は体力にも自信があり、研究意欲や好奇心も旺盛でした。今、国際文化研究科もそういう時期を迎えています。その分、期待や責任も大きくなりました。最近、本研究科の教員が栄誉のある賞を受賞したり、Top10%ジャーナルに論文を掲載したり、特許を出願したり、研究成果が国内外のメディアで紹介されるなど、国際的に活躍する、優秀な若手研究者が増えています。



国際文化研究科副研究科長 劉庭秀教授

このように、これから中年に向かっていく国際文化研究科の姿がとても楽しみです。皆様には、さらに安定感を増していく、国際文化研究科に、引き続き、ご支援とご協力をよろしくお願い申し上げます。改めて本日ご参加いただきました皆様に厚く御礼を申し上げまして、閉会のご挨拶とさせていただきます。